

第二期 第七十六号 (初版) (無料)

音信不通

本のビオトープ

2022. 11. 20 定有堂書店 発行

ドウルーズを読む

奈良 敏行

地図を構築する

ワクサカソウヘイ

哲学の難しさについて―デリダ、廣松渉、ドウルーズ岩田 直樹

汽水のほとりから (20)

小原 修治

きのうみた夢

萩原 俊郎

グリーンフケアをめぐる II

松田 裕史

東日本図書館紀行

ポスト東北祭と花火

芝野 浩貴

だんだんばなし、ついたり

ムラカミヒロミ

鳥取あれこれ その七十五

内田 克彦

八代日記 (三十二)

齊藤 仁昭

慎ましやかな原作

秦阜 梅林

何もかも終わりにしてしまおうよ

三浦 永理

徹夜

あぎの素生

…… 編集後記



ドウルーズを読む

奈良 敏行

(定有堂 店主)

去年の暮れあたりからドウルーズを読んでいる。読んでいけるけれど何一つ理解できない。理解できないから読むのが止められないのではないか、という気すらする。

そんな話をいつもの禅僧のMさんにしたら、「分からないのになぜ読むの?」と聞かれた。「年を経ているんなことが夢のまた夢、と思えるからでしょうか?」と答えた。「うむ」という一言だったが諾(うべな)いと聞こえた。

わかる事よりわからない事の方に心が惹かれる。日常というか、生きている事の現在形の中にあるときには、シンプルな見え方の方が心に馴染む。でもふと何かが失速し、どこから来てどこへ行くのだろうと思いはじめると、少し様子が異なってくる。生きている場の枠組みが拡張しはじめる。巨視的方向に拡張すれば時空的・宇宙的に広がり、微視的方向に拡張すれば量子力学的に広くしかし極微的に

底なしのものとなる。ここでは石も人間も同じものだどドルーズはいう。たしかに人も星屑も由来は同じだと人口に膾炙される。この場所と、ドルーズの機械論が、かぎりなく接近するところだろうか。

分らないことが魅力、これもいつものオブセッションだろうか。この言葉は自分の観念のアイコンのようなもので、反復して用い続けてきている。今年に入って、このオブセッションは「欲望」の別名なのだと思いついたようになった。分らない方がいいと思うようになったのはなぜだろう。ここ二年余の新型コロナ禍の閉塞と関係あるだろうか。いろんなことを停止（エポケー）した。自ずからの気分の変化だった。そして、命には限りがあるという観念が、ようやく自分に追いついてきた。

ドルーズを読む、でも何一つ理解できない。この理解できないということ、人と共有してみたいという気持ちがある、なんとなくある。読解して分るのでなく、読解して分らないということ、共有してみたい。否定したいのは「同一性」なのだが、共有して共有を否定するという遠回り、変だといえれば確かに変だ。ところで何が理解できないのだろうか。ドルーズの特異性は、頻出する概念の新語造成だと思う。

分らない方向へ傾斜していく経験は、過去にもあった。

そのころはそれをロシアフォルマリズムの異化作用という言葉で納得していた。知っていたと思っていたモノがある瞬間から見知らぬモノへと変貌する。ドルーズの新語造成の由縁は、それまで十分役割を果たしていた概念が、しだいに未知なぬものへと墜落して行った。というところにある。モノでなく概念が異化していくのだ。むしろその前提には世界の墜落がある。「機械状」へ墜下するのだ。墜下した世界には大洪水の後のように、石塊が転がっている。転がっているものはここでは概念だ。わたしには、ドルーズの概念を解き放ち、世界を再創造する力はない。でも本屋なので、概念の代わりに、書物を積み上げていくことはできる。

ひよっとしたらドルーズの意義は、その概念の網の目の時空だけで十分なのではないかという気もする。「ドルーズキーワード」（せりか書房）という概念辞典のような本がある。コンテキストから切り離れた概念の理解から、全体が再現できるかは不透明だが、もともと「器官なき身体」とはそういうものだったのかも知れない。わたしはひよっとしたら『差異と反復』が好きなのかも知れない。「このもの性」「此性」について、それは一期一会のことだと語る人（山内志朗）もいて、心に染みる。この一点を反復して論じた書物に『ドルーズを「活用」する！』（澤野

雅樹)がある。反復は同一的ではない。少しづつずれて反復する。その「ずれ」の一瞬が一期一会なのだ。

ドウルーズの世界が異化する根本は、多数者と少数者の垣根を大きく変更する点にも見られる。当事者問題も、そのように新しい概念を挿入すれば、この垣根を反転させることもできる。社会そのものが病んでいるのだから、病者を社会へ復帰させることは何の解決にもならないとする『ドウルーズと狂気』（小泉義之）も興味を引かれる。

ドウルーズを読む、というテーマの語りだが、ここには何らの結論もない。ただ読むだけだ。結論は外部からやってくるものだとしている。

2022. 10. 13

ヴィクトル・ボリソヴィッチ・シクロフスキー 『散文の理論』

水野忠夫 訳 せりか書房 1994

芳川泰久・堀千晶 『ドウルーズキーワード89』せりか書房

2008

ジル・ドウルーズ 財津理 『差異と反復 上下』河出文庫 2007

山内志明 『ドウルーズ内在性の形而上学』講談社選書メチエ

2021

沢野雅樹 『ドウルーズを「活用」する!』彩流社 2009

小泉義之 『ドウルーズと狂気』河出書房新社 2014

定有堂教室（仮称）ドウルーズを読む会

（講師） 岩田直樹氏 公立鳥取環境大学特任教授

定有堂教室「読む会」（岩田直樹氏 選書）

毎月一回 火曜日 詳細は店内掲示

太極拳教室（会場）定有堂二階 葉香クラブ（荷葉）

毎週 水曜 十九時半から ・土曜 十三時半から

講師 日本武術太極拳連盟 四段 公認A級指導員

地図を構築する

—新刊「出セイカツ記」にまつわる雑感—

ワクサカソウヘイ

(文筆業)

文筆業という営みを続けているわけだが、時に「構成作家」として仕事に従事することがある。そのクレジットは、主に芸人のコントライブにチームスタッフとして参加する時に使われる。

構成作家という仕事は、いったいどのようなものなのか。折に触れてそんな質問を受ける。これに答えるのが、とても難しい。複雑かつ有機的な業務を孕む役割だからだ。ライブの中身について芸人と一緒に打ち合わせをして、チケットの料金を決めて、他のスタッフさんをブックキングして、メインビジュアルをデザイナーさんと決めて、プロモーションを動かし、公式ツイッターの投稿をして、グッズを企画し、セミナーには予算にまで目を配る。その他諸々。とてもではないが、一言では言い表せない。ただ、それでも無理に一言で言い表すのであれば、それは「状況を構築して成す仕事」なのだと思う。私はそのような捉えで、構成

作家を続けてきた。構築すべきは、環境ではなく、状況だ。

先日、岩手県の遠野を旅した。そこにはかつての姥捨て山の跡地がある。もちろん現在において、そこに姥など捨てられてはいないわけだが、しかし荒涼としていて漠とした野は当時と同じトーンで広がっている。このように、環境というものが変わらなくても、状況が変わってしまったら、形のない景色は移ろいでいく。姥は山に捨てられなくなる。

環境とは、固定的なものだ。マクロで見てもミクロで見ても、それはこの銀河に蔓延る不変的な存在だ。地球という環境を大きく変えることは、小天体がぶつからない限り、難しい。個の性格に深く関係しているという腸内フローラは環境であり、そしてそれは三歳時点にほぼ構築の図が決定されるといえる。それに対して、状況は可変性を持っている。状況を変えることで、景色の先に選択肢は現れる。地球の形や腸内の細菌分布図は変えられないが、そこに根差して生きている私たちの行動範囲や創造範囲は状況をもつて変えられる。そしてそこにこそ、未来の可能性を開く確率を上げるアレコレが潜んでいる。私はそんなことを考えながら、構成作家をやっている。

たとえば、芸人が「水族館で単独ライブをやりたい」と言い出したとする。その願いを叶えるために、構成作家はなにをするべきなのか。ライブのできる水族館を探し出

し、そこを借りることだろうか。いや、違う。それは単純に「環境」を得ただけである。まずは水族館でライブをやるための「状況」を作らなければならない。それはつまり、水族館の関係者とコミットできるふるまいをつくり、なぜ水族館でライブを開催するのか周囲が納得するようなトーンを構築する、ということである。私がそれをスタツフとして実現させるならば、まず家からなるべく外に出て、あらゆる水族館をめぐる、魚や海獣を蓄積する。そうやって、水族館にまつわる空気感を構築していく。同時に、水族館関係のことも発信していく。すると、類が集まってくる。だんだんと生態系が現われ、然るべきタイムリングが巡ってくる。ここで一気に企画概要書を作り、物事を動かす。状況を構築して成すとは、つまりそういうことである。

「自分をとりまく環境のレイヤーから出奔する」、それが状況を作ることなのだと思う。平たくいえば、習慣を変える、ということでもあると思う。

このたび「出セイカツ記」という新刊を河出書房新社より上梓した。それは固定的な生活環境から飛び出し、ポンコツかつインチキな実験と冒険に身を捧げること、状況を変えようと奮闘した日々の記録エッセイである。

「出セイカツ記」に書いた様々な冒険、それをもって日常を構築することで、私は私自身の状況を変えることにも

成功した。書けることを選択肢が端的に増え、作家として延命した思いをいま抱いている。習慣も大きく変わった。

ここまで書いて気づいた。それはつまり、地図を作り、それを辿ることなのだ。状況を構築するというのは漠然とした環境の中に新しい地図をもたらすことであり、そして未来を成すというのはその地図の精度を確かめるということなのである。

構成作家とは、もしかしたら地図製造業者なのかもしれない。



哲学の難しさについて

—デリダ、廣松渉、ドゥルーズ

岩田 直樹（公立鳥取環境大学特任教授・

「読む会」選書人）

週一回は定有堂書店にお邪魔する。このところ奈良さんと「ドゥルーズ哲学の難しさ」について話すことが多い。

私は八月まで、構造主義以降の哲学の中で最大の難関であるドゥルーズ哲学を読んだことがなかった。哲学思想愛好者としてはお恥ずかしい限りだ。

それにしても、ドゥルーズの本が売れ続けている。手元にある『差異と反復（上）』（以下、河出文庫）は二〇二一年八月に第七刷、『意味の論理学（上）』は二二年四月第五刷、『アンチ・オイディプス（上）』は二二年二月第一二刷、『千のプラトール（上）』は二二年一月第六刷、『哲学とは何か』は二二年五月第三刷。フランス本国で哲学書を読むのは千人程度らしく、日本の読者数の多さに圧倒される。

ポスト構造主義を代表するデリダの著作を、ミレニアム前後に数冊読んだことがある（以下の刊行年は原書のもの）。初期の代表作『グラマトロジーについて』、『エクリチュールと差異』（ともに一九六七年）は厄介だ。かなり乱暴な言い方をすれば、「差延」概念をぼんやりとでも

掴めば、「こんなものか」と雰囲気はわかってくる。

もともとデリダを読もうと思っただけではない。フッサール後期現象学の手稿「幾何学の起源」（一九三六年）をフランス語に翻訳して解説を付した『幾何学の起源』（一九六二年）。現象学のみならず形而上学の全歴史を支配している「声の卓越性」を剔抉した『声と現象』（一九六七年）。これらの論文が読みたくてデリダの本を買い、そのついでに他の本も読んだだけのことである。

デリダをきちんと理解するには極めて高いレベルの哲学的素養が要求される。ルソー・レヴィナス・フッサール・ヘーゲル・フーコー論の「脱構築」は数周遅れでもなんとか完走できる。けれども、何者か全く知らないジャベス・アルトール論はさっぱりわからない。デリダ哲学の難しさは、概念の難しさというより、テキストが扱う対象（仮想敵？）を読者がどれだけ理解しているかによって読みの「深い／浅い」が決まってくることに起因する。結局のところ、それ以降、私はデリダを読んでいない。

話が逸れてしまった。ドゥルーズに話題を戻そう。

「ドゥルーズの概念は難しすぎる。前触れもなくいきなり出て来る。」と私。すると、「でも、廣松哲学の概念も相当に難しいですよね」と奈良さん。

ドゥルーズと廣松の概念の難しさを比較する視点を全

く持つていなかった私は、奈良さんの一言に驚き、「その理由を考えるのは面白そうだ」と大いに刺激される。

廣松渉（一九三三—一九九四）とドウルーズ（一九二五—一九九五）は同時代人である。文化的環境が異なるとはいえ、両者ともに哲学の世界的な潮流に掉さしている。

「廣松語」は漢語を駆使する。例えば「現相的所与」「意味的所識」「能知的誰某」「能識的或者」「四肢的聯繫態」等々。現代物理学、マルクス、現象学を三つの源泉にもつ廣松哲学は、それらの知識がある程度あれば読み進むのはさほど困難ではない。造語が頻繁に出現し最初はとっつきにくい夏目漱石の小説に似ているかもしれない。

廣松哲学と同様に、ドウルーズ哲学は少し慣れればそれなりに読めるようになるのだろうか。

八月から二ヶ月以上かけて、冒頭の主著『差異と反復』（一九六八年）、『意味と論理学』（一九六九年）、『アンチ・オイディプス』（一九七二年、以下ガタリとの共著）、『千のプラトール』（一九八〇年）、『哲学とは何か』（一九九一年）を読み継いできた。河出文庫で全一〇冊。たいの哲学書であれば、二、三冊読めば哲学の概要がわかり、その後は理解しつつ読み進めることができる。

ところが、ドウルーズは全く違う。一〇冊目にして「あれっ、こういうこと？」とコツをつかみかけたが、掌です

くった水のようにスルツとこぼれ落ちてしまった。

「差異的」微分的」「器官なき身体」「欲望機械」「モル状、分子状」「リゾーム」「平滑平面、条理平面」等々。理解を拒み続けるドウルーズ哲学。どうしてよいのか途方に暮れているとき、ドウルーズに挑戦する直前に読んだ解説書の一節をふと思い出した。その本とは、『千のプラトール』執筆中のドウルーズに直接師事した宇野邦一の『ドウルーズ 欲動の哲学（増補改訂）』（講談社選書メチエ二〇〇一年、講談社学術文庫二〇二〇年）である。（理解不能な解説書が少なからず存在する中で、國分功一郎『ドウルーズの哲学原理』（岩波現代全書、二〇二三年）と並んでお薦めの本だ。）

ドウルーズのわかりにくさは、それまで内部に閉ざされてきた哲学を異質なものに触れさせようとしていること、外部に開こうという「逆説的な試み」を最後まで続けたことにある。「だから、ドウルーズが「理解されていない」という事態を、彼の思想の本質的な事態だと考えてもいい。」（三八頁）

既成の知の「外部」へ向かう姿勢こそが「哲学する」ことであるとすれば、哲学の難しさは答えのない「現代」にこそ「わかりやすさ」に転じるのではないか。その意味でドウルーズ哲学は「新しい」。

汽水のほとりから (20)

小原 修治

(県立高校教諭 湯梨浜町松崎在住)

先日、久しぶりに鳥の劇場へ行った。鳥の演劇祭15が開催中で、ふだん足を運ばない自分でも、この時ばかりは毎年のように参加している。私の場合、一番のお目当ては、ゲストトークだ。これまでに鈴木忠志や平田オリザなどの演劇人はもちろん、多くの学者や文化人らが訪れている。今回のスペシャルゲストは、伊藤亜紗だった。彼女の話は『目の見えない人は世界をどう見ているのか』(光文社新書)で初めて知ったが、この本が売れて以来、早や七年、今や彼女は誰もが注目する人になってしまった感がある。

トークのタイトルは「利他」と表現」。伊藤が所属長を務める東工大・未来の人類研究センターの研究テーマ「利他学」の共同研究メンバーによる報告書を編んだ共著「利他」とは何か』(集英社新書)を踏まえたもので、鳥の劇場を主宰する中島諒人さんはこの本がきっかけで、彼女を招いたとのことだった。ちなみに、この本は、定有堂で以

前から「推し本」になっている一冊でもある。

トーク開始早々、中島さんは自身の思いをこう述べた。「表現ということが人間の幸せにどう結びついていくかは、自分にとっての重要なテーマ。その場合の表現とは、自分と他人とが良き関係を築くための表現で、このことが伊藤さんの研究する「利他」とどう結びつくのか知りたいという想いがあった」と。これに対する伊藤亜紗の回答がユニークだった。彼女はこう答えたのだ。「私たちはよく「利他は未来からやって来る」といったりするんですが、それは「利他」が能動的ではなく受動的なもので、結果としてそうだとしか言えない出来事であるという意味です。「利他」を受け取る側が「利他」を見出すことが重要で、行う側は受け取る人の豊かさを信じなければならぬ。「利他」は現象で、偶然なんです」と。中島さんのような表現者に対し、彼女は遠慮の無い直球を投げ返したのだ。

帰宅後、改めて『「利他」とは何か』所収の彼女の論考に目を通した。すると、「利他的な行動には、本質的に、「これをしてあげたら相手にとって利になるだろう」という、「私の思い」が含まれています。重要なのは、それが「私の思い」でしかないことです。思いは思い込みです。そう願うことは自由ですが、相手が実際に同じように思っているかどうかは分からない。(中略) 利他の心は、容

易に相手を支配することにつながってしまいます」とある。彼女が合理的利他主義や効果的利他主義を否定するのも、そこには「私の思い」はあるが、他者の思いが存在しないからだ。彼女が考える「利他」の本質は、目の前の相手をケアすることであつて、他者一般に対するものではない。

彼女が言うように、現代の利他主義の背後には「理性」への信仰がある。思うにそれはカントの定言命法を考へると理解しやすい。定言は、仮言（くならば）の対する語で、仮言命法は条件付きであるが、定言命法は無条件である。例えば、「嘘をつくな」が定言命法ならば、どんな場合も嘘をついてはいけない。が、であればこそ、それは生身の他者に関係なく成り立つのだ。西洋由来の「道德」には、この考え方が基本にある。伊藤が別の本（『ポストコロナの生命哲学』集英社新書）で「道德」と「倫理」の区別を強調し、「道德」を嫌うのは、この点に起因すると言へる。ところで、そうした西洋由来の「道德」の弱点を踏まえ、逆にその復権を企てた本がある。フランソワ・ジュリアン中島隆博・志野好伸訳『道德を基礎づける』（講談社学術文庫）がそれである。この本の中で著者のジュリアンは、中国古代の孟子の「仁義」を西洋の「道德」と対峙させた。重要なのは、古代中国には「意志」の概念が無い点である。ジュリアンによれば、カントは「意志」を「諸法則の表象

によつて原因性を規定する能力」（『実践理性批判』）だとし、「意志」は「理性の原因性」であり、自然な原因性とは別次元の様態だとした。だが、この「意志」の概念が無いからこそ、「仁義」には生身の他者が存在するのだ。

実はこの問題を考える上で重要な論者が、前掲『「利他」とは何か』に収められた國分功一郎の「中動態から考える利他―責任と帰責性」である。この論考の最後で國分は、「中動態においてとらえられた応答としての責任。これは中国由来の概念である義に近いものではないかと思ひます」と述べている。考えてみれば、孟子が「仁」の端緒だと説いた、今にも井戸に落ちようとする子供を救いたいと思う心は、能動的な「意志」によるものではなく、子供を見た瞬間に偶然に喚起されたという意味で受動的である。が、それは同時に自発的でもある。國分が説く中動態とは、まさにそのようなものとしてある。目の前の生身の他者に対し、「応答としての責任」を果たそうとすること。この「義」としての利他は、同書所収の前掲の伊藤亜紗論者が言及するような現代のアナキズムに通じるものでもある。

きのうみた夢

萩原 俊郎

(倉吉市在住者)

会社を辞めてから、身だしなみをする必要がないからか、鏡をとんと見なくなつた。それではいけない、身だしなみやおしやれは他人のためでなく、自分がきちんと生きていくためにあるのだ、と当初は反省していたが、やはり必要ないものはやらなくなる。

すると、どうなるか。鏡で自分の顔を見ないから、日々どんなツラを世間にさらして生きていて、自分がどんな性格好(としかっこう)の人間であるのか、次第にあやふや、どうでもよくなり、自分の「セルフイメージ」がぼやけてくる。時には本当に年齢を忘れる。

◇

◇

◇

これ、哲学で言えば、かつてのアインシュタインとインドの詩人タゴールとの「人が見ていない時、月は存在しな

い」という認識と実在を巡る有名な対話にも通じる。知らんけど。「人間に関わりなく、月は存在している」というアインシュタインに、タゴールは「人間の意識がもし月だと感じなくなれば、それは月ではなくなる」と主張するのである。ああ、インド哲学の神秘。

人間は手や足はともかく、顔は外から知覚することはできない。鏡をきつぱり見なくなると、セルフイメージが揺らぎ始め、はては「64歳の今と18歳の高校時代と、どれだけ違うのだー」などという不遜な思いまで抱くようになる。確かに、余計な処世術はいっぱい身につけたが、自分の中身(精神年齢)は高校の頃とちつとも変わらない気がするし…同感される方も多いだろう。

で、月に一度、散髪屋の鏡の前で「現実の自分」に接して、がく然とするのである。まあ、当たり前か。

◇

◇

◇

大島弓子の昔の漫画に、屋敷に住む80歳を過ぎた老人が、ある朝目覚めると「自分は学生なのだ」と思い込んでしまう作品があった。

家政婦のバイトで来た女子大生を昔のマドンナと勘違いして求婚するが、女子大生は老人が残っていたノートから彼の辛い過去を知り、「夢が覚めないように」と願う。つまり、片方は偽装であつても「共に月(老人)だと感じ

なければ、それは月ではなくなる」のだ。が、ふと夢から覚めかけた老人は、現実の自分を確かめようと…とてもせつないストーリーだった。

そういうえば昔はよく少女漫画を読んだ。大島弓子、吉田秋生、萩尾望都。こんなジイさんが、陸奥A子の『きのうみた夢』『こんべい荘のフランソワ』『ため息のゆくえ』なんてコミック本を後生大事に今も書棚に並べていると知ったら「ゲーツ」と思われるだろうなあ。まあ、「ほつ」としてくれ」ではある。

◇ ◇ ◇

ある時、知り合いの女性が「海外に単身赴任する夫の荷物を調べていたら、中から『パフューム』のDVDが山ほど出て来たんですよ」と、まるで息子の部屋からエロビデオを見つけたように話すので、彼の名譽のために「いえ、私は断然ご主人の味方です」とかばったことがある。

実は「パフューム」が出てきた時、私は「ちむどんどん」した。これが本来の使い方(笑)。まるで私たちが十代の頃夢中になった、あの「キャンディーズ」の再来ではないか。石破茂がラストコンサートに行ったのは有名だが、私も学校をさぼって公開録画に行き、先生から大目玉をくらった。60代とはそういう世代である。

ランⅡあーちゃん、スーⅡかしゆか、ミキⅡのつちとキャ

ラまで3人が見事に重なり、その上、私たちには懐かし「テクノ・ポップ」で歌い踊るのだ。これでは、はまらない方がおかしい。東京ドームのライブでは、若者に交じってかなりの白髪頭が息を切らしながら「縦ノリ」していたのではないかとにらんでいる。

◇ ◇ ◇

「共同幻想論」とはよく言ったもので、同じ夢を見るには複数の仲間を引き込めばいい。以前も書いたが、和菓子屋の主人とギター・デュオ「ローガンズ」(名前の由来は想像にお任せする)を結成したが、最近これにドラムとベースが加わった。みんなアラカン(アラウンド還暦)で、高校時代からあこがれていたビートルズと同じ構成である。「ただ、新しいバンド名が『シルバー・ビートルズ』というのが、何だかなあ」とメンバーは言うのだが、いや実はこれこそ偉大な彼らの結成当時のバンド名なのだ。

時々、年相応のセルフイメージなど「くそくらえ」と思う。素粒子研究で最近は「人間の観測によって実在は姿を変える」、つまりタゴールの方がじわじわ優勢という。

グリーンフケアをめぐる

II

松田 裕史

(高校教員)

『わたしからはじまる』の第2章は「怒りと語り」。身内が理不尽な死を遂げてしまったこと、犯人が捕まらないこと、無責任な報道と悲惨の消費、ステイグマの烙印など、およそ想像を絶する経験を経て入江さんは怒りの声を上げ始める。入江さんの怒りというのは、他人に対する表層的な批判やクレームではない。怒りすら愛のバリエーションと捉え、語りへのエネルギーに変えていく。批判でもなく、感情的に怒る(おこる)でもなく、僕たちは入江さんのように怒る(いかる)ことはあるだろうか？同調圧力の高い日本社会ではもしかしたら怒る(いかる)ことは避けられがちなのかもしれない。しかし、自分の声と主体を取り戻すために、時に怒る(いかる)ことは避けられない。それを封じ込めようとする社会こそ不健全だと言える。これに近い事象で言えば、一時期、国会前のデモが話題になったことがある。デモをしたところで社会は変わらないと冷や

やかな目を投げかける人がいる一方、柄谷行人は日本はデモができる社会になったとデモを肯定的に捉えていた。

また、第2章では柳田国男や若松英輔を引いて、「かなしみ」について思索が深められている。若松は様々な著作でかなしみをモチーフにしているが、かなしみを「悲しみ」「哀しみ」「愛しみ」「美しみ」「愁しみ」というように多面的、多層的に捉えている。特に、入江さんにとつては「愛しみ」が大切だったようだ。本書の「はじめに」の末尾には、次のようにある。

「悲しみは愛しみ 十分に悲しんでいい あなたらしく愛しんでいい あなたの前に世界は拓かれる わたしからはじまる 魂の再生の物語をあなたへ」

悲嘆にくれ、悲しみに打ちひしがれることに押しつぶされる地点から自分を愛しむ(かなしむ)ことができるまで再生する語り、これこそが本書の白眉だといえる。ある新聞の書評では、母によるステイグマを克服したことが愛でられていたが、語弊を恐れずに言えばそのステイグマの内実は特殊なものではない。他人に迷惑をかけてはいけなく、役立たずは生きていても仕方ないという価値観は広く世間に蔓延しているものであり、より目を凝らして見なければいけないのはその底に横たわっているものである。悲しみが愛しみになる語り、こそ僕は注目してみたい。

入江さんの悲しみを愛しみにした秘義は何なのか？(若松英輔には『悲しみの秘義』という著作がある。)それは、ありきたりだが様々な人との出会いであり、ケアであると見える。ただ、それらを要約したところで本書の核心に触れたことにはならない。ケアとは何かについて、「ケアとは立ち願われるもの。予定した時間に、予定した場所で始まるものでもなく、また、予定した時間に終わるものでもありません。目標や計画を持つものでもありません。」とある。そうであるならば、ケアについて書かれたともいえる本書の言葉たちは読むことで立ち願われるものであり、わかりやすい言葉で置き換えることができない。「悲しみの水脈」という言葉が出てくるが、悲しみの物語を読むことで「悲しみの水脈」に辿り着いていく。そして、悲しみや怒りは語られ、ほぐされることで、恥や恐怖から「わたし」の物語を解放する。ここまでくると、単に一人の悲しみが語られた本ではないことが納得できる。本書の後半は個人レベルを超えた(日本の)社会的な病巣にまで思いを馳せる。例えば、「自己責任論が蔓延する現代社会、弱者をかえりみない能力主義がはびこる中、弱者切り捨ての不寛容が顕在化しています。」「悲惨の消費・エンタメ化は、遺族や死別体験者に、恥の意識を一層深く刻むことになりました。」他人のグリーフすら商品にしてしまうメディアに、

それを消費せんとする社会に生きていることに辟易する。だが、だからこそグリーフケアや利他が求められている。スロウな本屋の店主さんが「万人向けではない」と言われたその本は、実は深いところで多くの人に届けられるべき水脈を湛えているのかもしれない。実際、入江さんの主宰する「ミシユカの森」に集うのは犯罪被害者の方や遺族の方だけではない。

入江さんの語りは今後も続くだろう。そういえば、『つながらりの作法』では回復するとは回復しつづけることだと書かれていた。それに倣えば、語るとは語りつづけること、読むとは読みつづけること、学ぶとは学びつづけること、愛(かな)しむとは愛しみつづけること、ケアとはケアしつづけること、生きるとは生きつづけること…。「つづける」という動詞は現実を抽象化し過ぎるくらいがある。実態として、つづけ、更新していくことが動詞を生きることになる。

事件遺族になるという受け入れがたい転回と人生の破断。それでもなお、「価値観や規範を客観視し、自分の人生を生きていけるようになったと感じています」と言い切れる人が存在すること自体も僕にとっては大きな励ましになる。

東日本図書館紀行 ⑤。ポスト東北祭と花火

芝野 浩貴 (地球探検家)

初めてインターネットカフェを利用したのは、新潟だった。長岡花火を観た後の宿泊所に困ったからである。コロナ禍で中止されていた日本三大花火も今年は復活したが、今年はポスト祭の街の様子を観察するため花火よりも図書館へ急いだ。(一書を捨てて街へ出ようというより、一書を求めて街に溶けようという感覚である。東北4大祭り再考は音信不通49号へ)

映画「峠」では、戦争を回避しようと旧幕府軍と新政府軍の仲介に苦悩する河井継之助を描いていたが、山田方谷や佐久間象山との絡みまでは描かれてはいなかった。長岡から信濃川に沿って阿賀野川とに挟まれた新潟市に着く。信濃川寄りの鳥屋野潟に新潟県立図書館は存在する。新潟駅からは遠いが自然の中にあり、道中の百日紅が印象的だった。梟もいるそうだ。カウンターは放射状。科学館も併設しており、開館から100年以上経ち歴史的重みはある。

北前船の寄港地酒田を經由して、秋田へ。

今春の魁星旗大会(高校剣道の5大会で、顧問の時は遠征に来ていた思い出の地)もコロナで中止だった。会場の秋田県立武道館が懐かしい。そこから2キロくらいだろうか、

県庁と市役所に挟まれた通りで、秋田県立体育館前の秋田県立図書館に辿り着いた。長岡花火と並ぶ国内二大花火の大曲花火が再開された日であった。館内は螺旋の坂道となっており登りやすい。方形の書架である。閉館日が水曜日。竿燈通りから秋田駅に向かうまでの久保田城跡の堀に咲く蓮の花が満開だった。8月上旬の東北豪雨で陸奥地方のJR線は不通の所が随所に見られ、大館経由で代行バスに乗り換え、何とか青森駅に到着した。北海道新幹線開通で新青森駅が近代的なことは見聞きしていたが、小さな青森駅がいつの間にか近代的に様変わりしていた。鈍行族の私にはショックであった。ねぶた祭りも何度が参加して「あの熱情」を知っているだけに、ねぶた通りの建物がどんどん壊されているのを見ると、山車の倉庫を心配する。青森灣を背に青森自動車道とのインターセクションまで南下して、八甲田山を眺めながらキロ弱歩き青森県立図書館へ辿り着いた。近代文学館を併設している。蔵書も多く、館内は広く、児童図書に厚い。岩木山を眺めながらアップルロードを通り、弘前、鹿角花輪を経て盛岡へ。

青森県立図書館も90周年は過ぎているが、岩手県立図書館も4月に100周年を迎えたばかり。ただし、これまでの3つの図書館と異なり盛岡駅に近い。情報交流センターアイーナの中にある。子育て世代が利用しやすいようなインフラと見

童書の充実が光る。県民が安心して利用している。閲覧スペースが随所にあり、ゆったりと仕事や調べ物ができる。遠野物語のコーナーがある。宮沢賢治ゆかりの岩手山を眺めることもできる。コンパクトで人為的な街づくりをしたオガールが気になっていたのも、紫波町(ホテル・図書館・役場・運動場・ジム・体育館・クリニック・美容院・飲食店・販売店・子育て支援センターなどが隣接に寄ったあとと仙台へ。宮城県立図書館(前身の宮城書籍館は1989年に設立)は理髪店文庫や工場文庫の歴史を持ち、早くから巡回文庫を始めており老舗の重みを感じるが、駅から遠すぎるので今回は立ち寄りなかった。仙台に熊が出没した日に山形へ移動。花笠まつりのパレードコース(7日町大通りを文翔館に突き当たるまで)を歩いた後、遊学館(山形県立図書館)へ移動。書架は地元の木材で作られており、木の香りが知的だった。

(リニユールした境港市図書館の香りもよい)

リニユールして駐車場を隣接したことや蓋付コーヒを飲みながら読書できることで利用者は増えた。花笠といえは紅花であるが、映画「おもひでぼろぼろ」と併せて、「紅花の守り人」を鑑賞されれば、エジプトナイル川からシルクロードを経て伝わり、藁・土・木からなる奈良の烏梅から発色させられる8色の紅を、「見て・染めて・食べて」楽しめ紅花の歴史と紅花愛を感じることができる。山形美術館には紅花屏

風も所蔵。山寺は初めてスルーした。作並温泉を経て一気に福島へ。信夫山の麓、福島駅から近くに福島県立図書館はある。プロボノでお世話になった文知摺観音近くの常円寺(12号)が懐かしい。水と歴史の道を歩き、銀杏並木をくぐり抜けたら福島県立美術館とともに出現。やはり特徴的なのは震災コーナー。原子力発電(543.5、543.4)、原子力工学(539)、放射線障害(493.1)、地震(493.2)、震災・復興・防災(369.31)関係の本が充実していた。

紀行前、名古屋から鳥取に帰省した親戚の子供が田舎の空き地で打ち上げ花火を楽しんでいるのを見た。その子の母親とは40年ぶりの再会だった。紀行後は、プレイパーク発祥の地、羽根木公園の側で線香花火を楽しんだ。丸い赤玉は色んな記憶を呼び起こす。遠く南米では上下に広がる水飛沫にあらゆる角度で反射してできる円形の虹(サークルレインボー)が見られるという。逆に「百花」では映画でも小説でも「半分の花火」が認知症における親子の記憶のシンボルとして描かれていた。2023年3月には八重洲ブックセンターも閉店するので、紀伊國屋と三省堂とともに「私の3大学生書店」のありのままの記憶は薄れていくだろう。現時点で昨年持续到47都道府県の街を観察することはできた。私が街歩きを続けるのは新しい景色を求めているのでなく、新しい視座を養うためである。

だんだんばなし、つけたり

ムラカミヒロミ

(フライング・ブックマン)

谷川俊太郎は「きりなしうた」というのも作っている。これは、アメリカ民謡の「バケツの穴」のように、堂々巡りをする類いの歌である。

同民謡は日本語の歌詞を付けて、NHKの「みんなの歌」で放送されたので、ご存じの向きも多かろう。

バケツに穴が開いている、どうしよう。

藁を詰めればいいじゃない。

藁はどこから調達しよう。

…といった、夫婦漫才のような掛け合いで、次から次へと問題が深まっていき、遂にふりだしに戻るといふもの。

綿谷雪のいう「尾頭循環型」であり、エンドレスに、果てしなく続く(続けることができる)。

「果てなし話」「反復譚」といった呼び方もある。(「ぐるぐる話」という呼称はどうか)

梶山俊夫にも『きりなしばなし』(福音館書店、一九七六)という絵本があるが、こちらは少々狙いどころが違うようだ。

マザーグースの「これはジャックが建てた家」は、このフレーズから始まって、詩の頭に次々と新しい語が付け加わって行き、「ジャックの家」がどんどん後ろに追いやりれて行く。

谷川俊太郎は「つみあげうた」という言い方をしており、彼自身、和田誠と『これはのみのびこ』(サンリード、一九七九)という絵本を実作している。

こちらは、「これはのみのびこ」の後に、「のすんでるねこのごえもん」のしっぽぶんづけたあきらくん」という風に足されて行く形。

お話では、ロシア民謡の『おおきなかぶ』がこのタイプで、爺さんが蕪を引き抜こうとして力が足りず、婆さんが加勢にやって来る、孫娘もやって来る、犬を連れて来る、猫の手も借りる、鼠まで使って、ようやく抜ける。その過程が、言葉の繰り返しと積み重ねでリズムカルに語られる。

「風が吹けば桶屋が儲かる」のような、前提と結論がかけ離れていて、容易に筋道が辿れない類いの話を「こじつけ辿り」と、荻生待也（『遊辞苑』、遊子館、二〇〇七）は仮称している。

原典は不詳だが、この諺は、江戸時代には普及していたようで、『軽口又おかし』（天和二年）や『世間学者気質』（無跡散人、明和五年）などに見られるが、ここで鼠が齧るのは箱や戸棚。よって儲かるのは箱屋と指物屋である。

楽翁（松平定信）伝の『雨窓閑話』（天明年間、刊本は嘉永四年）にも、「進喜太郎が僕才六が事并桶屋物語の事」という段があり、こちらは桶である。

旗本の家来・才六はおどけ者で、人を笑わせるのが上手かった。彼が考えた必勝の戦略と言うのが、先ず金を集め、紀州に行き、蜂と蜜を買い集める。蜜は樽に詰め、蜂は袋に入れる。敵襲があったら、柄杓で蜜を敵に掛け、袋を開けて蜂を解き放つ。蜂に刺され慌てふためいている所に切り込めば勝利は疑いなし、というもの。

翁は、人を笑わせるにもこれだけ工夫が要る。まして、人の道を行うのはそれ以上である。

しかし……と、ここで桶屋の話が引用されるのである。工

夫も過ぎれば、猶及ばざるが如し、「まはり速き事いはらん方なし。只工案分別もかぎりあるべし」と。如何にも白河侯らしい謹直さに溢れた御教訓である。ちなみに刊本の副題は「近古事績論評」である。

一方、近頃とみに耳にする機会が増えた「バタフライ効果（エフェクト）」は、似て非なるもので、ローレンツが五十年前にワシントンの学会で行った、気候変動の可能性に関する発表中の例え話である。

地球上の一地域のわずかな変化（ブラジルで一匹の蝶がはばたく）が、離れた土地に大きな気象変化（テキサスで大たつまきが起ころ）を齎すか、と問いかけたもの。

「もっと専門的な言葉遣いをするなら、大気は振幅の小さい摂動に対して、不安定にふるまうのだろうか。」（杉山勝ほか訳）と。

元より言葉遊びではないし、途中の経過が明らかにされている訳でもない。

鳥取あれこれ その七十五

内田 克彦（地域研究家）

「日本の学校の創立者」である鳥取出身者たちの一人として、今回は佐方しづ（志津、鎮）を取り上げる。私が名前を知ったのは、あきくらのゆう著『新選組を探る』を読んでいたときである。映画『るろうに剣心』で江口洋介演ずる新選組の「斉藤一」が、維新後には「藤田五郎」となつて警察に勤務する傍ら、妻のときをは寄宿舎の舎監として東京女子師範学校に奉職していた。次の記述がある。

明治二十四年（1891）にときをは体調を崩してしまい、同校の退職を余儀なくされてしまった。そのことを悲観したのが同校で教師を務めていた後閑菊野と佐方鎮（志津）だ。二人はときをはのことを按じ、せっかくだから自宅で寄宿舎を設け、その舎監になるように薦めたという。

そして、この佐方鎮が鳥取藩士の娘である、と書かれていた。詳しく調べようと、ネット検索すると、一八五七（安政四）年に、「因幡鳥取藩士（又は東京府士族）佐方易清の次女（又は長女）として生まれる」とあった。

さらに、国立国会図書館デジタルコレクションで、同窓会の「社團法人櫻蔭會」が編輯兼発行者である『桜蔭会史』の中に「佐方志津」に関する略歴が載っていた。

鳥取藩士郡奉行佐方易清の女。夙に漢文学を修め庭訓によつて徳を養い、母校創立の際入学試験を受け第一期生として入学を許可され明治十二（一八七九）年第一期生として卒業した。

「女子師範学校」は「小学師範学科」として、一八七四（明治七）年一月に開校、修業年限五年であり、第一期卒業生は、二月が一五名、七月が一八名であった（参照『杉田すゞについて』）。『桜蔭会史』では、さらに続く。

直ちに職を母校に奉じ附属小学、幼稚園、高等女学校、並に本校と各部門に於て教育の重任に当ること三十八年の長きに及んだ。而して最後は力を本校寄宿舎に注ぎ専ら母校生徒の薰陶に盡瘁へ（じんすい）した。

最近『学校創立者人名事典』（二〇〇七年刊）を見てみると、「佐方鎮子」の名が「共立女子職業学校設立発起人の一人」として出てきた。経歴が次の通り載っている。

- 一八七九（明治一二）年 東京女子師範附属小学校
- 一八八三（明治一六）年 前橋高等女学校
- 一八八四（明治一七）年 東京女子師範附属小学校
- 一八八五（明治一八）年 同附属幼稚園次席教師
- 一八八九（明治二二）年 一橋女学校教諭
- 〔一八九〇（明治二三）年 東京女高師教諭〕
- 一八九八（明治三一）年 東京女高師教授兼生徒監
- 一九一七（大正 六）年 辞職

『桜蔭会史』では、さらに続けて次の記述がある。

中等教員検定委員となり、或は後閑へ（「こかん」）菊野と共に女子作法書家事教科用書の著述を公にし、教育界に於ける功績顕著であつた。

「佐方鎮」でデジタルコレクションを検索すると、佐方・後閑の共著で『家事教科書』上・下巻、その続編で『家計簿記法』、『家事提要』、『高等女学校用家事教科書』上・下巻（一九一一（明治四四）年初版、一九一六（大正五）年に三版発行）を発行しているほか、『女子作法書』心得の部・実習の部・儀式の部などを発行している。

因みに、後閑菊野は、一九二四（大正一四）年に、桜蔭女学校（現在、桜蔭中学校・高等学校）初代校長に就任してい

る。

さて、既述のように、『共立女子職業学校二十五年史』を見ると、一八八六（明治一九）年三月に、「佐方鎮子」を含む二九名の発起人（多くは東京女子師範学校の関係者である）で「共立女子職業学校」の「教授を開始」したが、教室の狭隘のため寄附金を募集して校舎を新築し器具を完備しようと、新たに五名を発起人中に加名した、とあつた。さらに、「近時本校拡張募集の事」のとき、援助する名前の中に、佐方鎮子の名が挙がっている。

佐方は、日清戦争のとき「寒氣の為に凍傷に罹」る兵士のため、山川二葉の率先により「胴着を製し」て数万枚を戦地に送り、一九〇〇（明治三三）年「義和団の乱」により「愛国婦人会」が結成されたとき、公爵伯爵男爵の夫人一八人を含む三九人の発起人に名前を連ねている。

佐方は、一九一七（大正六）年に退職後は、神田高等女学校（現在、神田女学園中学校・高等学校）の校長に就いている。神田高等女学校は、一八九〇（明治二三）年に竹澤里が創立、校長をしていたが、一九一七（大正六）年に亡くなったため、その後任に就いたのだろうか。

佐方鎮は、一九二九（昭和四）年に亡くなっている。

八代日記

(三十二)

齊藤 仁昭

(ケバブジョンソン・

元長崎書店)

十月某日

なんでも値上がりしていますが、菓子原材料の値上がりも相当なもので、値上げ予告のファックスが止まらない。食べるものだけでなく包むもの、紙だとかフィルムだとかも値上がりしていて不安がつる。どうなっちゃうんだろうと思うのだけれど手立てもなく時間ばかり過ぎていく。

目先の出来事としては困ってはいるのだけれど、例えば、ゼリーを固める多糖類のひとつにローカストビンガムと言う、とある木の種子の成分でできたものがある、それもだいぶん値上がりするのだけれど、そもそもそんなものを地中海のあたりで収穫し、加工し、わざわざ運んできてまでゼリーを食べたいのだろうか我々は。もうそういうことはやめていこうという時代だと思うので、商売についても悩む。

紙の値上がりと言えば、書籍はどうなっていくのだろうか。こちらでも値上がりとか、重版に慎重になるとかになつてしまうのか。そうならざるをえないだろう。本が値上がりするのは仕方ないけれど、給料はそう安妥とは上がらないわけだから、本が買いにくくなつてしまうのはつらい。そしてさらに、円安のおかげで日課であるマーベルオールスターゲームの課金の価格も上がってしまった。普段はほとんどお金を使わないのだけれど、たまに買ってしまった「デイリースペシャル」セットが六百元から八百円になつてしまった。3割以上のお値上げ。あんまりじゃないですか。

十月某日

書店業界に長く関わる知人がついに自分の店を開くらしい。すばらしい。うらやましくもある。書店員の頃の自分は彼に多大な影響を受けた。いや書店員になる前も、辞めた後も影響を受けている。影響は受けたが自分のアウトプット(棚づくり)は彼のように美しくはなれなかったです。

八代でしばらくサラリーマンをしている経験により、また違った棚が作れるようになっていなのじゃないかなとも思うが、あれはほんとに毎日新刊に触れて、棚を触ることのできあがっていくものなのでそう簡単にはいかないだ

ろう。ああでもまた本の仕入れがしたい。

仕入れと言えば奈良さんが『ハマータウンの野郎ども』を「数十冊」仕入れたと読んだ。只事ではない数だと思っただけ。おそろく自分が勤めていた書店であったなら初回の仕入れで多くて3冊くらいだったのじゃなからうか。でもいろんなコーナーに置きそうなので、他の担当者とも併売したり、メインの平台に積んだりしてもいけそうかな。3冊だと弱気かな。100分名著名ならもつといけるかな。などと仕入れの妄想をして楽しい。やっぱり前職が恋しいのかな…。

十月某日

家の近所のTSUTAYAが閉店すること。レンタルがメインの店だったのでサブスク真つ盛りのこのご時世、仕方がないのかもしれない。レンタル落ちのCD、DVDやブルーレイを格安で放出していたので買わせていただく。ウエス・アンダーソン、ホン・サンス、ピクトル・エリセ、増村保造、ゴダール、クレイジーキャッツ、ゴンチチなどなど。

十月某日

久しぶりに練習しに東京へ出向く。もうほとんど東京の街に関心がなく、いや、関心がないのではなく関心を持って

る体力と財力がなく、羽田に着くなりスタジオへ向かう。6時間練習してのち軽く食事を済ませて、泊めてもらうためにギターの佐藤くん家へ向かう。

夜の2時に佐藤家に着いたが、佐藤さん、スタジオに家の鍵を忘れてきたらしい。家に入らず！仕方なしにカラオケボックスにイン。歌わずに好きな曲を何曲か流した後、に仮眠。6時の閉店時に追い出され、レンタカーを借りて、千葉にいる氏の彼女の家に合鍵を借りに行く。呆れ顔の彼女は呆れながらも優しく、キットカートをくれた。千葉のあのあたり、初めて行ったけどいいところだった。

鍵をもらってすぐ都内に戻る。車中、ゆるふわギャングの新譜を聴きながら、たいへん素晴らしいドライブだった。8時半ごろに家に着く。シャワーを浴びて仮眠。10時半からまた5時間練習。あまりに眠くて演奏中に何回か意識が飛んだ。

練習後、フライトまで余裕があったので珍しく四人で一杯ひっかけ。楽しかった。帰りの飛行機では揺れながら眠り続けたので隣の方にはたいへん迷惑であったと思う。申し訳ない。

慎ましやかな原作

秦阜 梅林

(楽人)

「カルメン」と言へば今日、何と言つてもビゼーの歌劇(グランドオペラ風に上演される事もある)や映画、それに基づくダンス作品等(フラメンコ他)異国情緒たっぷり、ゴージャスでグラマラスな姿に轟惑される…音楽劇として知られてゐる。

しかし、原作となったメリメの小説は、極めて慎ましやか。殆ど掌編と言へなくもなひ、我が国であれば「野菊の墓」的に小さな物語(尤も純真さからはかけ離れているのだが…) 其処に…

1 最初は伍長

語り部となる脱走兵は或るバスク出身の伍長、伍長と言へばもう少し後の時代忽然と現れた塙の画学生崩れ、小心者で自意識過剰な誇大妄想、宿命に翻弄される内、世界を、いや歴史をかへて了った男も想ひ出されるが、小さな器に

抱へ切れなひ欲望やシユトレスから突き動かされるやうに破滅へと突き進んでゆく「目の狂ひは」共通、…暗示してゐるのかもしれないが…些か深読みだらうか…?

2 真打登場

やがて現れるタイトルロール、対照的に絶対的な美しき、圧倒的な野生の魅力を武器に舞台狭しと闊歩する世にも有名な女主人公、カルメンシータ、マノンのやうに心揺れ動く華奢で気紛れな少女では無く、どこまでもワルに徹する、ピカレスクロマンではある、「ドン・ジョヴァンニ」以来の。此れもやはりスペイン、セヴィリアが舞台と云ふ点共通してゐる。フランスの作家達が隣国を舞台に他人事のエキゾシズムで飾つて…

けれども良識やらヒューマニズム、宗教の掲げる善を尽くあざ笑ふ此の人物を以てこそ、真の自由と人間性、ありの儘で自然な人間の姿を生き生き提示出来る、作家↓作曲家の掙へた像はまさにアンチテーゼ、現代の退廃は既に予見されて居たのだ…

3 そして結末は

絵に描ひたやうな転落の悲劇…

ここを謳つてしか、このピカレスクドラマは完結しな

ひ。「健康で、建設的、前向きな理想等此の世には存在しなむ」のだ、キリスト教社会の倫理観から一步でも踏み外した者には…容赦無く悪魔の嘲笑の中、死のみが解放のメシアとして甞する。其れ迄の戸惑ひや理性一切はヒロインに巡り会ひ氷解して了った…後は突き進み破滅するのみ…此れぞ運命…

4 アンサンブルの小道具

いったひ慎ましやかな此の原作は…唯全体の筋書き、骨組みを明示し、材料を供給しただけでは？

然し、其の道具立ての見事さに筆者は驚かされるのだ！例へばカスタニエツト、此の極めてラテン的、ローカルな小道具が「いつ、何処で、どんな風に」ヒロインの掌中委ねられ、彼女の心情に合はせて歌ひ出し、其の乾ひた響きが、全体の醸し出すエロスとどうマッチングしてゆくか…沸き出るパッションを巧みにコントロールし演出してゆくか…此処には極めて仔細に指示され描写されて居る、さう名曲セギデイーリヤやハバネーラを既に誘ふかのやうに！其の妙には唯驚く計りである。あのグラマラスな姿は此処に横たはるやう、予め小説中の「音楽劇の台本」に採寸迄済ませ用意されて居た訳である、すつかり！

2022.10.20

今回の一冊

P.メリメ「カルメン」(1845) 杉捷夫訳 岩波文庫刊
今回の一枚

G.ビゼー「カルメン」(4幕のオペラコミック→正歌劇版に。台本 メリメの小説により、H.メヤックとL.アレヴィ) (1873~74) DVD

C. クライバー指揮ヴィーン国立歌劇場管弦楽団と合唱団E.オプラスツォーヴァ、P. ドミンゴ、Y.マズロク、I.ブキャナン他 rec. 1978.12.09 ヴィーン国立歌劇場ライヴ CD

D. ミトロポウロス指揮メトロポリタン歌劇場管弦楽団と合唱団R.ステイーブンス、M. P. モナコ、「アマールラF」グワレーラ他 rec. 1957年1月12日 N.Y. メトロポリタン歌劇場ライヴ



(イラスト・秦阜梅林)

何もかも終わりにしてしまおうよ

三浦 永理

(青翔開智中学校教員)

去年は、始終そんなことでモヤモヤしていた。確かに不満はあるのだが、その不満を言語化しても違うような気がする。不満ではなく、新しいことを次々とやれる友人へのただの嫉妬心もあったかもしれないが。

思えば、いろんなものを辞めてきた。

小学校の頃、県大会で準優勝まで行った空手。引越した先の道場が合わずに辞めてしまった。

大好きだったミュージカルをやっていた大学のサークル。あと一年となったタイミングで辞めたせいで、最後までいたと思われている。

別な友人が始めた教育サービス。今は、一緒に仕事ができる関係になった。

何より、夢を叶えたと思って入った大手芸能プロダクション。配属が異なり、舞台制作には関わらなかったが、十代の頃夢見た商業演劇の世界に一番近い場所だった。

それでも、教育現場に行こうと思って、教員免許を取って、今に至る。

今の私を感じる閉塞感は、そうやって辞めてきて、次に向かう人生の棚卸しができていないせいかもしれない。

空手に始まって、転職まで。私が辞めたいと思った理

実は、今年に入って、手伝っていた団体を辞めた。手伝いはじめましたとも宣言をしそびれ、手伝うのを辞めましたとも宣言しそびれてしまった。

その団体は教員の友人が始めたもので、教員や社会人のゆるやかなつながりの中で、オンラインの勉強会や交流の場を持つという内容だった。離職率の高い教員の中で互いに助け合う。社会人とつながることで実際の授業にゲストで呼ぶなど、コネクションを生かす。なかなか人と繋がるのが億劫になっていたので、いい機会だと思って本格的に関わったのが去年の一年間だった。

ただ次第に、公立の小学校教員である友人と私との間ではズレもあつたり、実際に作業する人手が少なく、私がかなり動かなくならなくてはいけなかったり、様々な事情から「手伝う」の範囲を超えたので辞めてしまった。

由は何だったのだろうか。

ある程度大人になって、私がいぎ「辞める」となるときは、ご多聞にもれず、何か不満を感じている時だ。自分の思うように能力が発揮できなかったり、自分一人で孤軍奮闘している感覚になったり、能力値の微妙なバランスがひとつの理由かもしれない。

そんな私でも、今も仕事は続けているし、友人と勉強会や読書会を続けている。

ただ無意識に不満を溜めていないか、気になってしまう。そして、私はそれなりにはその不満を言語化するのだが、そのどれもが的外れな気がする。不平不満を口にしたところで、相談された側にも申し訳ない。

そういうところもあって、自分の中の不平不満を「自分がいけないのだ」と心の内にしまおうとしたり、関係のない人に相談するくらいに留めてしまったり、なかなか相手に言い出せない。自分でもその不平不満をどこまで溜め込めるか未知だ。相手からは急に私が「終わりにしたい」といつているようにも聞こえるかもしれない。

最近になって、最初の仕事を辞めてしまった本当の意味

を考えるようになった。ずっと夢見ていた舞台業界だった。一方で、自分の力量では、アーティスト側にならないと分かっていての妥協でもあった。それでも、あの出来事やあの人がいなければ、変わっていたかもしれないとも思うし、それに耐えきれなかった自分の「覚悟」が足りていなかったとも思う。

それでも一旦全てを終わりにして、別のことを始めたのは私である。

何もかも終わりにしてしまおうよ。

そんな気持ちはどこから湧いてくるのか。

不満や不安を言葉にし尽くしても、どれも違う。そんな時に全て投げ出す自分を想像した時に、新しい自分が立ち上がるのかもしれない。

不満や不安と他人が切り捨てるものの中にこそ、私の希望があるのではないだろうか。そうやって、自身の不満に向き合い、ケアできるのは、自分だけかもしれない。そうやって前に、前に。終わりの向こう側に向かって進む。

徹夜

あきの素生

(くうねるめがね)



ひよんなことから徹夜をすることになった。夜つびで起きてるなんていつ以来だろう。もともとよく寝る質で、睡眠時間が確保できない状況はとても辛い。「寝不足」は勘弁なのだが、「徹夜」となると、なぜだか少し気持ちが高まる。結果、「寝不足」になるのだけでも。

「徹夜」にまつわる記憶で最も古いのは、小学生の頃の大晦日。祖母の家に集まっていたとたちと、今年こそ必ず徹夜をし、初日の出を見るのだと息巻いた。普段は午後八時ごろには寝ていたので、夜更かしできるといっただけで興奮した。おおつびらに夜更かしできるのは、秋祭りとお晦日だけだ。秋祭りには、神社や体育館で神楽を見る。どちらの会場も寒いので、上着を着込み、毛布にくるまる。自然、途中で瞼が閉じてきて、いつの間にか眠ってしまったのが常だった。それを克服して、何とか頑張つて起きようと思ったことはないのだが、大晦日は違った。年が明ける、ということに、大きな意味を感じていたのかもし

れない。

こたつに入って紅白歌合戦を見る。ここで脱落した年もある。どうやって徹夜を完遂するか、計画を立てたこともあった。何時から何時はUNOをするとか、確かそんな感じの。「ゆく年くる年」までたどりつけたときは、とうとう年越しの瞬間に立ち会おうのだと得意満面だった。しかし、頑張れたのはここまで。一番年下の弟が毎年必ず最初に寝落ちし、それを囁す年長組も、半時もすれば眠りについた。最年長のいとこだけは、徹夜を果たしたのだったか。自分は先に寝てしまっていたので、よく覚えていない。徹夜はかなわなかったけれど、あのひんやりとした空気の中で、いつもと違う重たい布団をかけていとちたちと眠るのは、徹夜に挑むのと同じくらいに特別でうれしいことだったように思う。

学生時代は、何かにつけて夜更かししていたような気がする。とはいえ、入学したての頃は、友人たちが通常運転でいる中、こらえきれずにひとり舟をこぐこともままあった。自分だけ、いつまでも幼いように恥ずかしかった。

そのうちに耐性がついて、暇だからという理由で、たまに夜のドライブがてら、友人たちと海やら山やらに出かけるようになった。港で夜光虫を見、天の川を見た。山か

らは、街の夜景を見た。海にしても山にしても、自分たちが知っていて、運転して行ける場所は限られるので、大抵いつも同じ場所に向かった。こうしてみると、年がら年中イルミネーションを求めていたかのようだ。ささやかな光を見ながら、夜の中でぼつぼつと語る。昏間も一緒にいるのに、いくらでも話すことがあった。暗く静かな空気自分分が溶け出すのだろうか、夜でなければ話せなかったことも、たぶんあっただろう。

徹夜にも慣れ、またぞろ暇を持て余していたある日、夜の国道をどこまでも走ってみよう、と思いつき、友人二人、車に乗り込んだ。ちなみに、走るに適した格好の良いスポーツカーなどではなく、中古の軽自動車である。が、自分にとっては、いろんなところへ一緒に旅をしてくれたよき相棒だ。

とにかく西へ西へと走った。夜の国道をただひたすら走るといえるのは、なんというか、「無」といった感じだ。道が空いていたのでストレスは少なかったと思うが、これといった記憶もない。しかも、辞めどきがわからない。国道は、どこまでも続いていく。

三、四時間も走っただろうか、道沿いにファミレスが見えた。砂漠でオアシスを見つけたときは、こんな気持ちだ

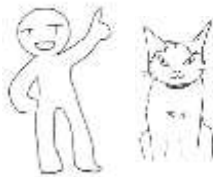
ろうかと思った。いくらでも話すことがあるはずの夜だったが、このときばかりは二人とも無口だった。知らない土地のファミレスで、チョコレートパフェを食べた。パフェのおかげで、終わりの見えないドライブを打ち切ることができた。まだ夜は明けていなかった。

ファミレスを出たあとは、気が抜けたように東へ走った。白々と夜が明けてきたところで島が見え、そこに渡る橋が見えた。もちろん、橋を渡った。島の周りをぐるりと走りながら、水面に反射する朝陽にこの旅の意義を無理やり見出した。でもそれも悪くなかった。

久しぶりの徹夜に向けて、今まさに夜を徹して体調を整えている。もう島に渡る元気まではないだろうけど、何とか走り切ることができそうだ。

(イラスト あきの素生)





・編集後記…

猫カフェは相変わらず完成の気配なく、とうとう開店予定の張り紙も剥がされてしまいました。残念。でもまだ外装のイラストは残っているし、なにより、最近お店の中からホンモノの猫の鳴き声があるんです！夜通るとかわいい声が聞こえてくるので、ついガラス戸に張り付いて暗い店内を窺ってしまう。傍から見ると完全に危ない人です。

でもあきらめない、あきらめずに待ち続けます。

ドラマメリア（編集長）



本の現場のことですが、「書店」（空間）、「本屋」（人）と主軸をとらえてきたのですが、ここ数年もう一つ別のレイヤーが存在してきているように感じはじめてきました。遅ればせですが…。

奈良敏行（発行人）